

【主要枕詞一覽】※中学受験 国語学習用

■枕詞(まくらごとば)

①それ自体は直接の意味を持たず、②ある特定の言葉を修飾し、③短歌の調子を整え、歌に情趣を添えます。④音数は五音が普通ですが、三音や四音、六音などのものも少数あります。枕詞は約1200語あり、古くは実質的な意味を持っていたと考えられますが、時代が過ぎるにつれて形式化しました。

基本	枕詞	かかる語修飾する語	語義と用例
★	あかねさす (茜さす)	①日、昼、紫 ②君(天皇、主君、あなた、の意)	①茜(あかね)色に照り輝く、の意から。 ②照り映えて美しい、の意から、ほめたたえる気持ちを込め、「君」にかかる。 あかねさす 紫野行き 標野(しめの)行き 野守(のもり)は見ずや 君が袖(そで)で 振る(万葉集)
	あきづしま (あきつしま・秋津島・蜻蛉島)	大和	大和(奈良県)の一地名、アキツを指したらしいが、やがて大和の国全体、さらには日本の国を指すようになった。ちなみに、「秋津(蜻蛉)」はトンボの古名。 大和には 群山(むらやま)あれど とりよろふ 天(あめ)の香具山(かぐやま) 登り立ち 国見(くにみ)をすれば 国原(くにはら)は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし 国ぞ あきづ島 大和の国は(万葉集)
★	あしひきの (あしびきの・足引き)	山、峰(お)	足を引きずりながら山を登る、山の裾(すそ)を長く引く、などの説があるが、未詳(みしう)。 あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を 独りかも寝む(拾遺和歌集)
	あづさゆみ (梓弓)	張る、春、引く	弓の弦(つる)を張ったり引いたりすることから。「梓(あづさ)」とは、アズサの木のこと、材質が堅(かたく)、鎌倉時代頃まで弓の材料として用いられた。 梓弓 春の山辺を 越え来れば 道も去りあはず 花ぞ 散りける(古今和歌集)
	あらたまの (新玉)	年、月、日、春	年や月、日があらたまる、の意からか。未詳。「新玉(あらたま)」とは、掘り出されたままで、まだ磨(みが)かれていない玉のこと。 あらたまの 年たちかへる あしたより またるるものは うぐいすの 声(拾遺和歌集)
★	あをによし (青丹よし)	奈良	顔料とする青土(あおに)が奈良山の周辺で産出したことからか。 あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり(万葉集)
★	いはばしる (石走る)	垂水(たるみ瀧)、瀧	石の上を激しく流れる、の意から。 石走る 垂水の上の さわらびの 萌(も)え出(い)づる 春になりけるかも(万葉集)
	うつせみの (現身)	世、代、人、命	現身(うつせみ)とは、「この世の人」の意。 うつせみの 世は常なしと 知るものを あきかぜ寒み 思ひつるかも(万葉集)
	かむかぜの (神風の)	伊勢(いせ)	神風(かむかぜ)とは、神の威力によって起こるといふ激しい風。神風の息吹(いぶき)の「い」と同音である「伊勢」にかかる。また、イセツヒが風を起した伝説があることからとも言われる。 神風の 伊勢の国にも あらましを なにし かけむ 君もあらなくに(万葉集)
	からころも (唐衣)	着る、袖、裾(すそ)、裁(た)つ	唐衣(からころも)とは中国風の衣服のこと、そこから衣服に関する語にかかる。 唐衣 裾(すそ)に取りつき 泣く子らを 置きてぞ来ぬや 母(おも)無しにして(万葉集)

★	くさまくら (草枕)	旅、結ぶ、結ぶ(ゆう)	旅先で草を結んで(束ねて)枕とし、野宿(のじゆく)をしたことから。野宿とは、野外で寝泊(ねと)まりすること。 家(いへ)があれば 筥(け)に盛る飯(い)を 草枕(くさまくら)にしあれば 椎(しい)の葉に盛る(万葉集)
	しきしまの (磯城島の、敷島の)	大和、日本(やまと)	奈良県の磯城島(しきしま)の地に都があったことから。 敷島の 大和心を 人間はば 朝日ににほふ 山桜花(やまざくらばな) (本居宣長)
	しらぬひの (不知火の・不知火しらぬひ)	筑紫(つくし)	都から「知らぬ日(多くの日数)」をかけて行く地、の意があるが、未詳。 しらぬひ 筑紫の綿は 身につけて いますは着ねど 暖かに見ゆ(夫木和歌抄)
★	しろたへの (白妙)	①衣、袖、紐(ひも)、袂(たもと) ②雪、雲、波、富士、羽	①白妙(しろたへ)が白い布の意であることから、衣服に関する語にかかる。 春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣干したり 天の香具山(万葉集) ②白妙が白い布の意であることから、白いものにかかる。 田子の浦 うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺(たかね)に 雪は降りつつ(新古今和歌集)
★	そらみつ (そらにみつ)	大和	ニギハヤヒノミコトが空飛ぶ船に乗って大和の国を見下ろしたことからとする説があるが、未詳。 そらみつ 大和の国は おしなべて われこそをれしきなべて われこそませ(万葉集)
	たかてらす (高照らす)	日	高く照りたまう、の意から。 やすみしし わ(大君)のおおきみの 高照らす 日の皇子(みこ) (柿本人麻呂)
★	たまのぎの (玉の緒)	長き、短き	玉の緒は「玉を貫(つらぬ)いた緒(ひも)」のことで、その長短から。 玉の緒の 長くもがなや 世の中に ありとある書(ふみ) 読みつくすまで(本居宣長)
★	たらちねの (垂乳根の・足乳根の)	母、親	乳房が垂れた、母乳が満ち足りた、などの解釈があるが、未詳。 たらちねの 母が釣(つ)りたる 青蚊帳(あおがや)を すがしといねつ たるみたれども(長塚節)
★	ちはやぶる (千早振る)	神、わが大君、社(やしる)	神が威力(いりよく)を発し、すさまじく荒々しい、の意から「神」や神に関する語にかかる。 千早振る 神代(かみよ)も聞かず 竜田川(たつたがわ) から紅(くれなゐ)に 水くくるとは(古今和歌集)
	ぬばたまの (千早振る)	黒、夜、夕、月、夢	「ぬばたま」とは「ヒオウギ」という草のことで、その実が黒いことから、黒や夜に関する語にかかる。 ぬばたまの 夜霧(よぎり)の 立ちて おほほしく 照れる月夜(つくよ)の 見れば悲しき(万葉集)
★	ははそほの (ははそほの、柞葉)	母	柞(ははそ)とはナラやクヌギなどの植物のこと。最初の二音が同音であるため、「母」にかかる。 ははそほの 母を思(おも)は 仮初(かりそめ)に 生まれし われと あにおもはめや(斎藤茂吉)
	ひさかたの (久方の)	光、天(あめ・あま)、雨、月、雲、都	「日射す方」の意か。天空に関する語にかかる。 久方の 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ(古今和歌集)
	もののふの (武士の・物部の)	八十(やそ)、氏、宇治	武人や官人を意味する武士(もののぶ)は人数や氏が多いことから。「八十(やそ)」とは、数の多いこと。 もののふの 八十(やそ) 少女(おとめ)等(ら)が くみまがふ 寺井の上の 堅香子(かたか) (この花(万葉集))
	ももしきの (百敷の、百磯城の)	大宮(おおみや)	多くの石を置(た)たみ築いた建物、の意から「大宮」にかかる。 ももしきの 大宮(おおみや)人(おみやび)と はいとまあれや 桜(さくら)かぎして 今日(けふ)もくらしつ(新古今和歌集)
	やくもたつ (八雲立つ・八雲刺す)	出雲(いずも)	多くの雲の立ち上る出雲の国、の意から。 八雲立つ 出雲(いずも) 八重垣(やえがき) 妻(つま)こみに 八重垣(やえがき)をつくる その八重垣(やえがき) (古事記)